和歌浦天満宮の見所

御本殿

慶長十一年（一六〇六）に、和歌山の領主であった浅野幸長公が再興したもので、桃山建築の研究に欠かせない貴重な社殿と評されています。その特色は社殿を彩る彫刻と彩色です。彫刻は「諫鼓苔むす」「瓜田に沓を入れず」など中国故事を題材にしたものや、長寿、富貴という願いを込めたもの、龍や獅子、獏といった霊獣、鳳凰や鶯、梅や牡丹、菊など、様々なものが生き生きと彫り上げられています。そして社殿全体が鮮やかな彩色に彩られています。正に絢爛豪華な桃山時代の造形です。

この社殿は紀州根来出身の塀内吉政、政信親子によって建てられました。塀内政信は寛永九年（一六三二）に、江戸幕府の作事方大棟梁に就任します。全国の大工の頂点に立ったのです。その非凡な才能を、この社殿に見ることが出来ます。

楼門

建物に「慶長十」（一六〇五）の墨書があるので、本殿と同時期の建立であることが分かります。「一間一戸楼門」という形式の門では国内最大の規模です。

楼門は「禅宗様式」で造られています。軒の垂木が扇を開いたように放射状に並ぶ「扇垂木」となっているのが、禅宗様の大きな特色です。神社建築に禅宗様を用いた初期の例として貴重です。

瓦は「滴水瓦」という、それまでになかった最新の形式のものを用いています。

東西廻廊

楼門に左右に付属して建つ建物です。本来は間仕切りのない、吹き曝しの建物で、お祭りの際に参列者が居並ぶ場所でした。楼門とともに高い石垣の上に建つその姿は、下から見上げると、あたかも羽を広げた鳳凰を思わせます。

和歌山市和歌浦西二丁目一―二四
和歌浦 天満宮
電話（〇七三）四四四―四七六九番

和歌浦天満宮のしおり

御祭神　贈正一位太政大臣　菅原道真公

創　立　康保年間　九六四～九六八

由　緒　菅原道真公は延喜元年（九〇一）に太宰府へ赴く途中、風波を避けてこの和歌浦に立ち寄られました。

その時地元の漁民は艫綱を巻いて急ごしらえの座を作り、道真公をお迎えしました。風波が静まり船出の時に

〝老いを積む身は浮き船に誘われて遠ざかり行く和歌の浦波〟

〝見ざりつるいにしえまでも悔しきは和歌吹上の浦の曙〟

と詠じられ、太宰府へ旅立たれました。

時は過ぎ、康保年間（九六四～九六八）に、文章博士橘直幹公が和歌浦を訪れ、道真公を追慕して御神霊を勧請したのが、当社の始まりと伝えられています。

橘直幹公は漢学に優れ、漢文でしたためた「申文」という文章は名文で世に聞こえ、鎌倉時代には「直幹申文絵詞」（出光美術館所蔵）という絵巻物が描かれています。

その後江戸時代の始め、慶長五年（一六〇〇）に紀州の領主となった浅野幸長公が、慶長九年（一六〇四）頃から造営を始め、慶長十一年（一六〇六）に完成したのが、現在の社殿です。

楼門から振り返ると、「和歌の浦に潮満ち来れば潟をなみ（片男波）葦辺をさして鶴鳴き渡る」と山部赤人が詠んだ「和歌の浦」が一望できます。御手洗池と片男波の砂嘴、布引の海岸、長峰山脈に囲まれた和歌浦湾、そして紀伊水道と遙か向こうには四国が望めます。

木々の緑と海の青、空の青、山並みの影、日の光、渡る風、これらの風景に、古くから名所、歌枕として世に聞こえ、多くの人々の訪れた万葉の和歌の浦を感じずにはいられません。

国指定重要文化財

御本殿　桁行五間、梁間二間、一重、入母屋造、正面千鳥破風付、向拝三間、檜皮葺　慶長十一年（一六〇六）建立

末　社　天照皇太神宮豊受大神宮本殿　二間社流造、檜皮葺　慶長頃建立

多賀神社本殿　一間春日造、檜皮葺　慶長頃建立

楼　門　一間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺　慶長十年（一六〇五）建立